C・G・カーシーカル編

シュラウタ祭全書　第二巻
梵文部第一部

辻　直四郎

一九五八年に第一巻梵文部と英文部第一部を（東洋学報四一巻第三号、一九五八年、九二―九六頁参照）、一九六二年に同じく英文部第二部を（同上四六巻第三号、一九六三年、一四一―一四二頁参照）、世に送ったシュラウタ・コーシャの第二巻梵文部第一部（プラヴァルギア祭を含むアグニシュトーマ祭）が出版された。第一巻の場合と同じく、現在使用しうるすべてのヴェーダ原典から、マントラ（讃歌・祭詞の類）とブラーフマナ（祭式に関する散文規定）とを集録し、最古の祭式綱要書と目されるバウダーヤナ・シュラウタ・スートラの該当部分を添えている。この大規模な出版のもつ高い価値と重要な意義とについては、既刊の部分を紹介したときに述べたから、ここに繰返す必要はない。第一巻梵文部の刊行からすでに十数年をへだてて、今第二巻第一部を迎えたに際し、ただその内容を概観し、ヴェーダ祭式の研究に対する意義に触れることとする。

梵英両語による短い序文（17 pp.）は、資料の説明と記述の方針とを含み、これに続く本文は次の三部分からなっている。

㈠アグニシュトーマ祭（Agniṣṭoma, p. 1―598）。ヴェーダ本集およびブラーフマナ書から、アグニシュトーマ祭に関する部分を、内容に従って一八一項に分けて収載し（p. 1―510）、これに続いてバウダーヤナの該当部分を印刷し（p, 511―598）、前者と同一の項目番号を附して照応の便を計っている。

㈡エーカダシニー（Ekādaśinī, p. 599―604）。ソーマ祭において一頭のサヴァニーヤ犠牲獣の代りに十一頭を捧げる場合の規定。㈠と同じくここにもバウダーヤナの該当個所が添えられている。

㈢アグニシュトーマ・プラーヤシュチッターニ（Agniṣṭoma-prāyaścittāni, p. 605―686）。アグニシュトーマ祭中に起こる過誤に対する贖罪の規定で、その中には相当に複雑なものがある。バウダーヤナの該当個所が添えられていることは㈡と同様である。

最後に祭壇等（mahāvedi, uttaravedi, sadas, havirdhāna）の設営に関するバウダーヤナ・シュルバ・スートラの一節（XXX. 4）を載せ（p. 687）、比較的に詳しい索引（p. 688―757）と正誤表（p. 758―760）をもって終っている。

ソーマ祭はヴェーダ祭式の中枢であり、アグニシュトーマ

はソーマ祭の基本形である。シュラウタ祭式の学習者は新月・満月祭、供獣祭等によつてハヴィル・ヤジュナ（ソーマ以外の供物を用いる祭式。シュラウタ・コーシャ第一巻参照）の概要に通じたのち、アグニシュトーマを会得して複雑なソーマ祭の奥堂に進む。この重要な祭式は、今世紀の始め W. Caland と V. Henry との名著 L'Agniṣṭoma (2 vols., Paris 1906, 1907) の中に詳述されて、祭式に関心をもつヴェーダ学習者の最好の入門書となつた。しかしこの書が出版されてからすでに半世紀を遙かに越え、その間に多くの原典・飜訳が公刊された。シュラウタ・コーシャはこれらの文献からアグニシュトーマに関する個所を集録するに努めている。

プラヴァルギア祭は任意にアグニシュトーマに随伴しうるが、基本的部分には属さないから、Caland-Henry はその詳説を省いた（L' Agniṣṭoma, p. XVI, n. 2 参照）。しかし特殊な要素を含むこの祭式は、宗教・文化の観点から興味ある問題に富み、J.A.B. van Buitenen: The Pravargya. An ancient Indian iconic ritual. Described and annotated (Poona 1968) は、その起原・意義の解明を主要な課題としつつも、祭式の過程をも詳細に描写して (p. 55 et seqq.)、R. Garbe のアーパスタンバに基づく記述 (ZDMG 34, 1880, p. 319–370) に代つた。シュラウタ・コーシャがプラヴァルギアに関する資料をも収載していることは甚だ便利である。

ソーマ祭がハヴィル・ヤジュナと異なる主要な点の一つは、ウドガートリを首班とする歌詠祭官の参与である。ブラフマン祭官の職務はしばらくおき、ソーマ祭はアドヴァリウ祭官とその補助者の行祭一般のほか、ウドガートリ祭官とその補助者の詠唱 (stotra) とこれに呼応するホートリ祭官とその補助者の讃誦 (śastra) とが一定の順序に従つて執行されるところに特徴がある。ことに歌詠は特別の知識を要求し、サーマ・ヴェーダに属する大量の文献を生んだ。シュラウタ・コーシャは各詠唱につき、旋律 (sāman) 使用上の根本的区別、即ちラタンタラプリシュタ (rathantara-pṛṣṭha) の場合とブリハット・プリシュタ (bṛhat-pṛṣṭha) の場合とを別々に載せ、資料の許すかぎりジャイミニーヤ派に関しても記述を怠らず、前述の Caland-Henry の著書に対し一段の進歩を示している。

シュラウタ・コーシャは結局原典の抜粋集録であり、バウダーヤナ・シュラウタ・スートラの該当個所と合せ読んでも、連絡ある祭式の進行を理解することはできない。英文部が刊行されて、バウダーヤナ以外のスートラ文献、ことにサーマ・ヴェーダ所属のものの関係個所が訳出されれば、この困難は大いに緩和されるであろうが、そのときでもなお Caland-Henry の記述が欠くことのできない指針として残る

ことは疑われない。その他の参考書を列挙することは本書評の意図するところでないから、ここには最近のもの二三を挙げるにとどめる。

Asko Parpola: The Śrautasūtras of Lāṭyāyana and Drāhyāyaṇa and their commentaries. An English translation and study. Vol. I: 1. General introduction and the appendices to Vol. I. Helsinki 1968. Vol. I: 2. The Agniṣṭoma (LSŚ I—II, DŚS I—IV). ib. 1969. 第一部はサーマ・ヴェーダ文献の総覧を含み、第二部は両スートラの最初の英訳でその理解と利用とをいちじるしく容易にした。インダス文字の解読に従事するこのヴェーダ学者には、ラーティアーヤナに関する論文 (e.g. Raghavan Felic.-Vol. Madras 1967, p. 554—566; Raghu Vira Memor-Vol. New Delhi 1968, p. 69—85) のほか、On the Jaiminīyaśrautasūtra and its annexes. Orientalia Suecana 16 (1967), p. 181—214 の論述があり、ジャイミニーヤ派のスートラ文献の研究に寄与するところが多い。またこの派の文献として、Premnidhi Shastr: Jaiminīya-Śrauta-Sūtra-Vṛtti of Bhavatrāta. New Delhi 1966 も重要な出版である。

シュラウタ・コーシャ第二巻第一部の出版は、アグニシュトーマ祭の研究に必要な根本資料の原文を提供し、ヴェーダ祭式の学徒に測り知れない便宜を与えた。その編纂主任C・G・カーシーカル博士の労を多とし、その学殖に絶大の敬意を表するとともに、これに対応する英文部が一日も早く上梓されんことを切願する。

(Śrautakośa. Volume II, Sanskrit section part I. Agniṣṭoma with Pravargya. 23, 760 pp., Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala, Poona 1970.)